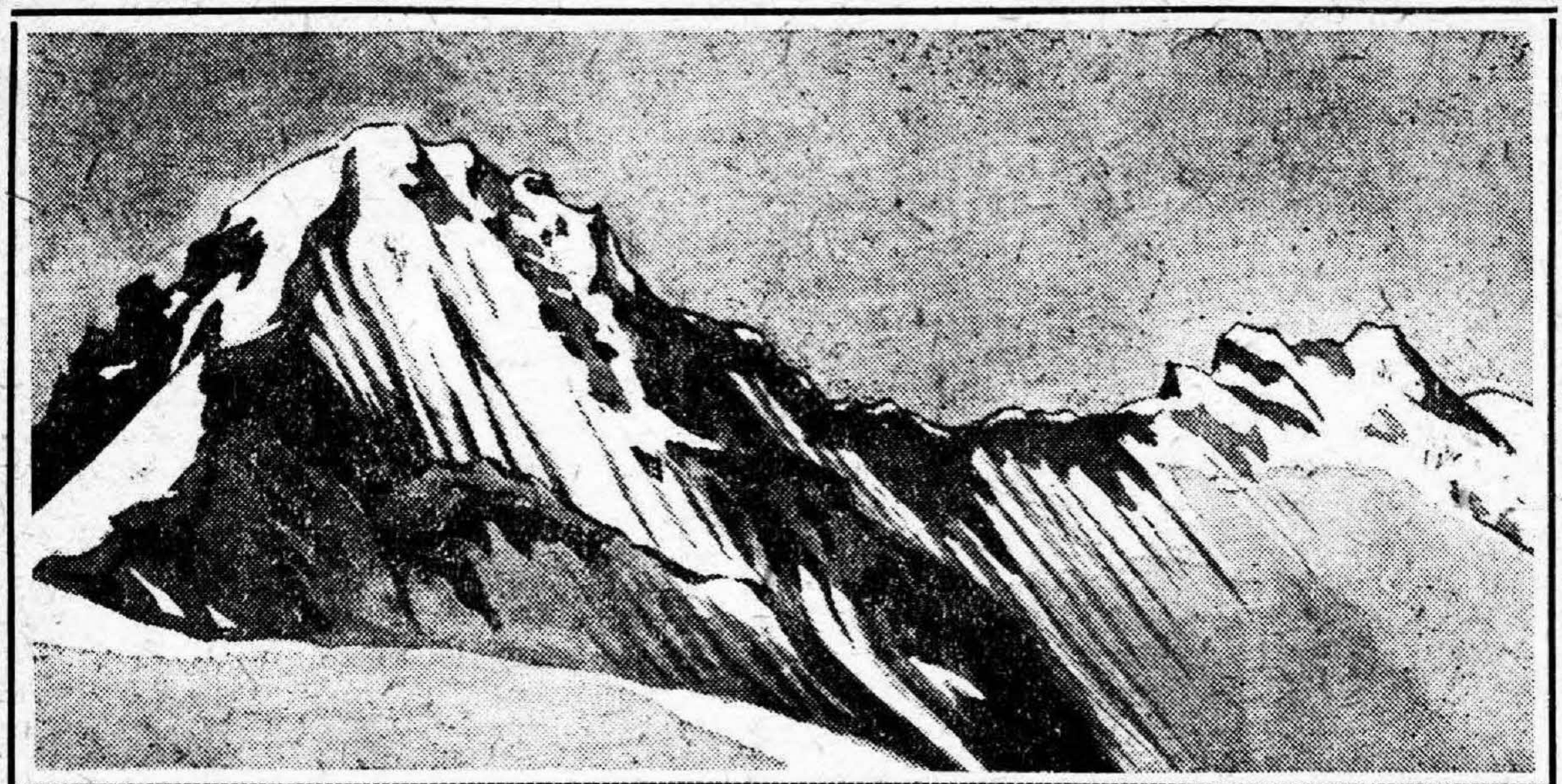

※針葉樹會報※

通卷第九十四號

大牟田を訪ねてくれた針葉樹會員の事ども

近藤

都を離れて滿三ヶ年、其の間實に苦しい事もあつたし嬉しかつた事もある。

其の嬉しかつた事の一つに表題の事件がある。嘗ては共に山に登り共に山を語つた針葉樹會員諸兄が、大牟田を訪れてくれたと云ふ事は小生にとりては實に飛上る程嬉しい大事件である。是から感謝の微意を以て諸賢の訪問事件を書き並べて見やう。

(一) 高木兄

數回の手紙の往復で高木君が大牟田出張と云ふ事になつた。見物に來るのかと思つたらあら恐ろしや社用を帶びて三井の大牟田に於ける事業を詳細調査に來ると云ふ。而も愈々大牟田に現はれて會つて見ると、若手社員二名を引き連れて是れも昭和四年商大卒業の西田君（野村合名）と合計四名である。

此の驛頭の高木は昔の高木とは似ても似つかぬ高木であつた。學校を出てから拾數年浮世の荒波を踏み越え〳〵して來た逞しい高木である。矢張り社用で來たせいかなと一寸考へたが二言三言話し合つて居る內にすつかり昔の高木に返つてしまつた。

それから數日各所調査を重ねて大阪へ歸つた。何しろ四人掛りで各事業所の說明役の話を全部即座に覺えて、晚宿に歸つて四人して話し合つて全部書き並べてしまふ。商賣とは云へ流石の小生も驚いたね。小生の勤めて居る事業所は遂に見學させる事が出來ず、申譯無い氣持であつた

が是れも致方なかつた。

然し此の數日は小生にとりては忘れる事の出來ない嬉しい數日であつた。せめて何處か山へ案内したかつたが、未だ別の會社の調査が殘つて居るとかで早々引上げられた。然し高木も地下數千尺の坑内に這入つたのだから三池に來た甲斐があつたと云へやう。

(二) 堀岡君

堀岡君は門司三井物産在勤であつた爲め大牟田へは數回出張して來た。

彼は昔の彼とは少しも變らぬ彼である。東京へ出張する時は必ず堀岡君を煩はして特急の寢臺券を入手した。特に女房子供丈上京させた時は門司驛で色々お世話になつたりした。申譯無いとは思ふが實に便利である爲め遂頼んでしまふと云つた具合である。堀岡君とは一番多く會つて居るので變つた處が見え無いのかも知れない。

一度伯耆大山に一緒に行く約束をしたが遂々履行出來なかつた。過日紀元節の日會社の人と大山に行つた。そして蟹の河原を一人登りながら此處を堀岡君が矢張り登つて行つたのだなあと考へながら登つた。

天氣が惡くて登頂出來なかつたが、北海道スキー行以來滿一年一ケ月振りのスキーであつたのだから是も大變である。

(三) 矢作君

私の方の會社ばかりでは無いが、民間會社が統制組合の人を遇するのは正に國賓待遇で矢作君が三池染料工業所に現はれたのだから驚いたね。三井の賓客の常宿三井クラブに恭しく泊つて戴いて、一夕宴席を催し遠路をねぎらふと云つたAクラスの接待である。然して會社としては小生がたま〳〵矢作君の舊友であると云ふので俺にも是非此宴席に侍べろと云ふ有難い話。外の客なら眞平御免だが矢作君とあつては願つたり叶つたり、商賣の話なんか全然そつちのけにして山の話や昔の話をして一晩愉快に過した。全く矢作君もうまい商賣を見付けたものだれ、又來ないか、又Aクラスの接待をするぞ、おゝ賓客よ。

(四) 森(舊姓十合)君

森君にも驚かされたよ。堀岡君が空然大牟田に來て電話を寄越し、今森が染料へ行つたからと云ふ。扨て森とは何者ぞ、一寸思ひ出せなくて聞き返したら十合だと云ふ。なんだ十合か十合が何時森になつたか、なんて悠長な事を云つては居られない。商賣で染料工業所に來たのだと云ふ。十合と染料とは別段關係は無い筈だと考へたのは認識不足で、十合には無いが森には關係がある。關係がある所か森六商店と云えば染料工業所にとつては大切な〳〵お得意樣である。此處の若主人に十合がなつて居らうとは神ならぬ身の知る由も無い。

森商店の御主人、若主人、專務取締役支配人と首腦部全員が三池染料工業所に御出で下さつたのだから是も大變である。

此の時の森若主人も小生にとつては矢張り山の友、針葉樹會員としての森君にしか僕の眼には映じない。懷しい森君である。君とは確か五色温泉で一諸だつたと思ふ。何時何處で會つて

も矢張り嬉しい。

あの染料工業所の臭い應接間で外の人々と一諸になつて商賣の話をして居る君ではあつたが、僕には矢張り十合健二君としか思へない。商大山岳部員十合であり針葉樹會員十合である。

(五) 村尾君

ぺんちやんが遂に來た。下關に出張して來たのを巧みに引き伸ばして久住山に一諸に登つた。それは小生の待望久しきに渉る針葉樹會員と共に九州の山に登り得た感激であつた。

實は鳥栖驛で會ふ迄は久住へ登るのは止めにして、熊本縣の立願寺溫泉で一晩ゆつくり飲み且つ語り且つ湯に浸るつもりで居たのだが、ぺんちやんの顏を見たとたんに久住山へ登る事にしてしまつた。

仕度は何んにも無い着のみ着のまゝとは此事である。むしろぺんちやんの方が仕度が整つて居るのだからあきれた。

會社の山好きな人と三人で山麓の星生溫泉に一泊し翌日紅葉の山へ嬉しい登りである。當日は稀に見る日本晴で、宿では頂上に登ると四國が見えると云ふ嬉しい話に元氣一杯、二時間半位で頂上に登つてしまつた。頂上でぺんちやんが變なものをリュックの中から出した。諸君何だと思ふ、驚く可し物凄い立派な寫眞機である。

村尾君が寫眞機を玩ぶ樣になつたんだから時代も進んだものだね。(と云ふ意味の事をある時小生が云はれた事もあつたから其の仕返しをやつて置く。)

それから法華院溫泉に下つて一風呂浴び晝飯を賴んだら、今日は女中が山に木を切りに行つて居るから飯は出せぬと云ふ。では何か食べるものないかと云つたらおやぢキヤラメルを出した。

それを食べながら峠を越して昨夜泊つた星生溫泉に下つて晝食にありつき、大牟田に歸つた。ぺんちやんは一泊して準急で歸つた。更に一日延ばして炭坑に案內仕樣と思つたが、其の日の晝迄にどうしても下關迄歸つて居らぬと、出張中具合が惡いとの事で惜しい別れをした。たつた二日間であつたが、心行くばかり二人で山を歩き得た喜びは何物にも代へ得られぬ喜びであつた。

こんな邊鄙な處へ立寄つてくれるのも針葉樹會員なればこそと實に感謝に堪えない。本年になつて既に磯野君が福岡迄來たので福岡で、久し振りで會つた。

あんまりよい氣持になつて醉つぱらつたので歸りは磯野君と別れ〳〵になつて其の儘になつてしまつた。醉つて居たとは云へ殘念であつた。

此次は誰が大牟田に現はれるか、是れは現在の僕にとつて樂しい期待である。(以上)

テムポオシユヴングラア (二)

私は本書を通讀して獨り秘かに喜んだ點がある。それは次の三點について、かれ〳〵私の考へてゐた事が、之等優れたスキートレイナーに依つても主張せられてゐる事を知つたからである。

一、前傾姿勢は足首を強く曲げる事に依つて得らるゝ事。二、前傾のある限りホッケは淺い方が良い事。(之については曾て會報に發表した)三、ステムクリスティアニア(本書のは開き出しクリスティアニア)はボーゲンとクリスティアニアの結合したものでありその割合は如何様にしても差支ないと言ふ事。

扨て飜つて我々にとつて重要な點は、競技スキーと一般スキー(所謂山スキーをも含めて)を區別してスキー技術を考ふべきだと言ふ事である。新複合(滑降と廻轉)競技の發達につれて、競技スキーは山スキーが曾て俺の領分だと主張してゐた區域に這入つて來て、今や一般スキーをその理論で指導しやうとしてゐる。所謂ゲレンデを上下してゐるスキー大衆ならそれでも差支ないかも知れぬが、山スキーはそれではならぬと思ふのである。山スキーでは競技スキーに無い條件が加はる。即ち先づ深雪、(競技の様にパーンが作られてない)、次に滑り行く先に何が出て來るか分らない、又滑りながら道を確めて行かねばならないから、能力一杯のスピードを出せない、廣い場所が少い、必然的に弧の小さい廻轉が要求される、その次には相當の荷物がある。此等の諸條件の下に於て弧の大きい外足荷重遠心力廻轉が如何なる人にとつて可能であるか?それを我々は知らなければならないのである。私は山スキーに於ても、卓抜した滑走者が重い荷物を背負ひつゝ素晴しい平行クリスティアニアで廻轉し得る事を否定するものではない。又それを目指して努力すべき事も知つてゐるのであるが、一ケ年にせい〳〵延日數十五日間位しかスキーを穿けない山スキー家(スキー大衆をも含めて)が先づ何を習得しなければならないか、どうすれば最もスキーを樂しみつゝ山を滑り下り得るかと言ふ事を考へなければならないと思ふのである。競技スキー術を參考にして之にならひつゝ、今こそ正しき山スキー術を作り上げるべきだと思ふのである。此の點に就て本書は附錄『F・I・S・世界男選手權に於けるひねりの問題について』なる一文に於て述べられてゐる様に滑降競技とに於ては優れた選手は滑り方を變へてゐたさ言ふ事、今年の神宮大會に於て、急に雪質が惡化した爲めに新複合競技では、良質雪に慣れた北海道選手の成績が惡かつたと言ふ事は非常に參考になると思ふのである。

然らば山スキーはどうしたら良いか?私は此處で此の問題に就て解答を與へる事は出來ない。

之は非常に大きな問題であり、日本山岳會或は新設せられた山岳聯盟邊りで衆智を集めた研究——理屈ばかりでなく——に依つて初めて作り上げらるべき問題だからである。此處に日本山岳會や山岳聯盟を持ち出したのは、その偉方(エラガタ)が既に積極的に大衆指導に乘り出した、しかも單に大衆のみならず大衆の指導者養成と銘打つて乘り出したからである。

我等が尊敬すべき先輩、熊さんも當然その偉方に入るべきであり、現に先日奥日光で行はれた鍛錬會には講師として參加せられてゐるのである。私はその鍛錬會の一半を知り得たので、之に對する私見を述べ、敢えて熊さんの御參考に供し樣と思ふのである。

二月二十三日、孫さんと我々一行三名は鍛錬會より後れる事一時間にして出發した。行く先は五色山である。十一時、白根澤を離れて「中ソネ」の尾根筋に出る迄に追ひ付いてしまつた。張り

付けシールがはづれて鋲で止めたり、相當ゆつくり登つて此の狀態である。勿論鍛錬會にはキツクターンを教へる必要のある樣なのが居るから相當時間もかゝるが、第一ラッセルの仕方がなつてない。きつとワックスで登つてゐるのが居るのだと孫さんと話しながら一行に追ひ付いて見ると、果してその通り先頭の千家がワックスである。私は上達者がワックスで行く事を非難するのではないが、公式の講習會——競技者を養成する會ではない——に講師が此んな下手なラッセルで山へ登るものだと教へるのは愼むべきだと思ふのである。それ丈ならまだしも、其の夜の講話で、スキー登山にワックスを使用する事を强調し、『温泉岳へは皆樣へ迷惑を掛ける事を恐れて、シールを張つたが、今日は雪の見當もついたからワックスで行つた。皆樣に御迷惑は掛けなかつた。スキー登山もワックス使用で愉快さを增加する』と。いかにも今日の五色山位でシールを使用するのはなつてないと言はむばかりである。私は思ふ、冬山登山の指導者養成會に於て之は許し得ぬ言動であると。登頂に出來る限り力をセーブするのは登山の重要條件である。五色山はあの程度の講習生には登頂がやつとである。その人々に對してワックスで行けと言はむばかりの講話は暴言と言はざるを得ない。重ねて言ふ、ワックスで五色山へ行けるのは非常に良い事で、そうなるべく努力すべきではあるが、あの講習會に於て主たる講師がワックスで行つて見せるのは正しくないし、その話が不適當と言ふのである。先にも述べた樣に、講習生はシーズ中何時でもスキーをやれる人々ではない。ワックスで苦しむ前に爲すべき事があらうし、ワックス技術を體得する前に山へ行けぬ樣な年になつてしまうであらう事を心配するのである。此の邊の點に於て、山岳聯盟はスキー聯盟の協力を得るのは正しいが、その指導理論をその儘鵜呑みにしてはならないと言ひ度いのである。しかも千家はスキー聯盟に於ても一般に近い人である。スキー聯盟に山へ行くスキー大衆を任せて置く事は禁物の事却て毒にならないかを心配するのである。

翌二十四日にも講師として取るべからざる點が一つあつた。生徒の希望に依つて金精峠行きをやめてスキー練習と言ふ事になり、第二ゲレンデ上の森林帶に入つて行つた所、昨日の暖氣の故か雪はブレーカブル氣味で、上々とは云へない。然し廻轉が不可能——生徒の一部にとつても——と言ふ程ではなく、所に依つては吹き溜りで非常に良い所もある。それで二、三回、廻轉した跡などは良い練習場となると云ふ狀態であるに拘らず、雪が悪いからと言つて第二ゲレンデのスケートリンクに集めそこで滑らし、所謂テムポオクリスティアニアを生徒が此處でやるのである。之は善い悪いと言ふ議論の問題ではない。講師としての良心の問題である。生徒の爲すを思ひその上達を考へるならばスケートリンクでスキーをやらせる手はないと思ふのである。宜敷く新雪の中で、そしてこういふ場合にはこうして廻轉するんだ、此處ではこうだと親切に指導すべきではあるが、あの講習會に於て術も必要であるが敎へ方も必要である。講師たる者、技要がないのだと言ふならば勿論それ迄の事ではあるけれども。

そして又講師たる者、自分のやつてゐる滑り方と口でする說明とが一致しなければならない。此處に亦敎師たる資格の難かしさ

があるのである。

千家が生徒の前で公式に皮肉つてゐる通り、殘念ながら山岳スキー家はスキー聯盟に太刀打出來ぬ。然しながらそれだからと言つて山岳スキー家が何にもせずに、俺は山へ登ればそれでいゝんだと言つてゐてよいであらうか。しかも指導者を養成しやうといふ人々が此處で誤解のない樣にして貰ひ度い事は、講師たる者、必ず技術的に最も優れてゐなくてはならないと主張するのではないといふ事である。之は例へば、オリンヒック選手を養成するトレーナーが、必ずしも選手自身よりすぐれてゐないのを見て分るであらう。唯必要な事は敎へるべきものを持つてゐる事であり、敎へらるべき欠點を見出し得る能力を持つ事である。そして又指導の方向を持つ事である。此の意味に於て、私は現在の山岳界の上部に居る人々の勉强こそ先決問題と思ふのである。敎へられるのは必ずしも自分より力の上の者からのみではない。互に切磋する事こそ此等の問題を解決する唯一の道であらう。

重ねて結論を述べよう。我々はスキー聯盟（競技者の代表と言ふ意味で）の協力を求めその敎を受ける必要はある。競技技術の進歩は彼等の力に依るからである。然しながら我々はそれ丈ではいけない。その最高のものを如何に我々の必要に取り入れて行くか、これこそ我々の爲すべき仕事だからである。我々の爲すべき仕事は我々のものだ。特殊を以て一般を律する危險を除くものは我々の仕事である事を思つて貰ひ度いのである。

× ×

「今日のスキー」の紹介がとんだ脫線してしまつたが、本書に就ては尙ポーゲンとクリステイアニアとが關聯がないと言ふ主張、斜滑降に於ける體の正面は流水線に對してどの程度の角度を持つべきかと言ふ疑問、——之は廻轉時に於ける肩のひねり、上體の位置に關係があり、色々問題の出る所である、——前傾を得る爲めに積極的に前へ乘り出す代りにスキーを後へ引くと言ふ議論、最後に譯語の問題と、未だ論ずべき點はあるが長くなるから此の邊で終りにしやう。丁度之の原稿を書いてゐる最中にアレーの「新しいスキー」の映畫が封切られた。之を見て不思義に感じたのはラインル、ドウシアの技術を敎つたと言ふアレーの技術に外傾と言ふ點が强調せられてゐない。次に「ひねり」が寧ろ積極的に敎へられてゐるといふ事である。之は全く期待にはづれた感じであつた。今度は孫さんから「スキーフランセ」の譯本を借りて讀み度くなつた。讀んで氣が向いたら又書かせて貰ひませう。（以上）

續テムポオシユヴング

A R A

アレー演ずる所の「新しいスキー」映畫にアレーと驚いて、買たてのほや〳〵と言ふ孫さんからスキーフランセを借り出して、御本人樣より先に讀まして貰つた。ラインルと言ひ、アレーと言ひ借り物で濟ましたし、熊さんがアレーを買ひ込んで勉强？するさ言ふ事態なので重ねて會報上にアレーを紹介するのも無駄ではなからう。アレーは言ふ、競技に勝つた滑り方が最良のものだ。そして俺はF・I・S・の大會に優勝してゐる。從つて俺のスキーが世界中で一番だ。此の最高のものに達するには次の樣な敎授方

法が取らるべきだ。（二七頁）

一、直滑走（直滑降、斜滑降、凹凸面の滑降）
二、除雪技法（全制動滑降の事）
三、横滑り
四、クリステイアニアピュール
五、スケート技法
六、跳躍技法

五、六は補助的の技術であり、その主流は一から四迄である。そして從來の全ての教科書で強調せられてゐたステムボーゲン・ステムクリステイアニアは、そのステムの故に、平行クリステイアニアはそのキツカケの伸び上りの故に排斥せらるゝものであり、之等は曾てテレマークが置き去られたと同様に、やがては忘れ去らるべき古き技術であると、とアレーは豫言する。（二一頁）以下アレーの特に強調する所を順を追つて述べて見よう。

（1）直滑走

變つた主張は直滑降に於ける體重のかけ方で、後足に⅔、前足に⅓、（四一頁）そして兩スキー共内側エッヂに多くかけると言ふ點である。此の内側エッヂ體重は、氷結した道路を滑る様な場合に横辷りを防ぐ爲めに取られる特殊なものであるが、アレーは之を一般的姿勢として述べてゐるのであつて、スキーの位置との關係に於ける一般法則として『兩スキーの間隔と内側エッヂの加重は、スキーの前後の差が減じるに比例して、又兩スキーの重みが同じくなるに比例して增大しなければならない』（四四頁）のである。内側エッヂ體重が一般的姿勢だと言ふ點には疑問がある。會員各位の研究を願ひ度い。

斜滑降に於ては體重は谷足である。ラインルに於ては外傾姿勢を取るとするが、アレーでは横辷りを防ぐ爲めに谷足體重になると言ふのである。即ち山足スキーは體重を掛けると横辷りするが、重みを抜いて置くと自然と谷側スキーと一諸にならうとする（四七頁）ので工合が良いのである。此の谷足體重に就ては、前號に述べた點で、いささか訂正しなければならない所がある。ラインルの言ふ樣に外傾姿勢を取ると、自然に谷足體重となる。そして滑降の方向が谷側にずれるのを防ぐ爲めには谷足體重が有効である。之は荷重に依るスキーの廻轉と、滑降の方向とが逆になる爲めと考へられるのであるが更に研究して見度い。唯谷足體重を認めなければならない場合があるとのみ此處では述べてをく。凹凸面の滑降方法は映畫に於ても色々强調されてゐるのであるが、本質的には直滑降斜滑降と何等變りはない筈のものであり、斜面の變化に應じて、姿勢の前後傾を調節して行けば良い丈のものである。從つてアレーの言ふ所は、之を特に强調した特殊のものとして考へれば良いのである。

（2）除雪技法

之は全制動の事であり、スティムを排斥するアレーも全制動丈は體重兩足均等であり、スティムの色險がなく、初心者に必要な制動と停止の中間點をもたらすものなのである。（二六頁）序ながらアレーがスティムを排斥するのは、その形がV字型である爲めに、一方の脚は力の方向に對して捩れの動作を惹起し、不安定、轉

倒、骨折、捻挫等の原因となるからなのである。(一二三—四頁)従つて全制動は廻轉の出來ない初心者が、極く遲速度で停止の爲めに教へられるものであつて、從來の樣に全制動廻轉を本質的のものとなし、それに到達する過程として教へられるものではないのであつて、全く經過的段階のものに過ぎない地位のものとなつてゐるのである。アレーの金科玉條のクリステイアニア・ヒュールとは全く何等關係はないのである。

(3) 横滑り

映畫を見た人は何故に横滑りが斯くまで強調せられるのか疑問に思ふであらうが、之は本を讀む事に依つて解決がつく。即ち横滑りは『獨立した動作であり、旋回や停止の動作の基礎的役割をなすもの』(一二六頁)なのである。横滑りと言へば我々は階段登りの反對の場合、即ち細い溝の樣な所を下る場合丈をすぐ思ひ浮べるのであるけれども、映畫で見た通り、アレーの言ふのは之丈ではないのであつて、斜滑降のすり落ち(變な言葉だが意味は分ると思ふ)が大切なのである。此の横滑りはスキーの角付をなくし、スキーの後部から始まり、『荷重は兩スキーから谷側スキーの上に移され、横滑りしてゐる間中この谷側スキーの上にかゝつてゐる』(一六三頁)のである。此のスキーの後部から始まる所に、クリステイアニア・ピュールに近づく所があるので、此處を少しく詳細に述べよう。『先づ斜滑降の姿勢から出て、スキーの踵の重みを最大限に抜く爲に前傾を增す。體重は兩スキーに等分にかけ、谷側スキーの内側エッヂと山側スキーの外側エッヂの角付を除々に緩め、兩スキーを斜面に平に置くやうにする。この時、谷側の肩で斜面の上の方に體を捩り乍ら、體の半廻轉を行ふ。かうして兩スキーは先端で支へスキーの踵を谷側へ向けるのである。この時の體は後傾姿勢をとり體重は踵にかゝる。かうして、スキーの先端が斜面の上方へ登つて行かうとする時起る雪の抵抗を緩和する。——譯語がおかしく意味がはつきりしない——次に强く前傾してスキーの停止したとき、横滑りは完了するのである。この時の姿勢が後に述べるクリステイアニア・ピュールの準備姿勢と同じなのである。』(六二頁)之で斜滑降横滑り停止が出來た譯であるが、横に滑り落ちてゐる間中角付はなくし、體重は谷スキーにかゝるのである。

此處で注意しなければならない事は、前述の通り、之はクリステイアニア・ピュールの準備姿勢と同じなのであるが、單に準備姿勢と同じと言ふ丈ではなく、前傾、スキー後部の抜重、スキーの踵の振り出しは、本質的にクリステイアニア・ピュールと異る所はないのである。之を强調すれば直滑降からのクリステイアニア・ピュール、更らに斜滑降谷廻りクリステイアニア・ピュールともなるものである。さてこそ、アレーが著書に於ても、映畫に於ても、横滑りを强調する所以なのである。

(4) クリステイアニア・ピュール

遂に我々は最高の段階に達した。直滑走、全制動、横滑り、之丈出來れば何人も此の最高の技術が得られるのだ、そして一般スキー家も之を習得する事に依つて『どんな荷物を持つても旋回する事が出來る』(一一一頁)のだ、然らばその最高のものとはどんなものか、少しく詳しく書き出して見よう。便宜上四段階に分け

て說明する。

1　斜滑降姿勢　體重谷足、山足は前へ出てゐる。

2　準備姿勢　回轉方向の反對側に上半身を半回轉させる。
　兩スキーの先端は揃へられ、體重は均等にかけられる。

3　廻　轉　廻轉の方向に身體を完全に廻はす、內側スキー約十糎前出、體重は外足、そしてその內側エッヂに乘る。
　前傾を強めスキーの踵から拔重し輕くする。

4　停　止　停止の場合は、廻轉の終りの動作を强調し、
　前傾を一層强くすればよい。

準備姿勢は映畫を見ると能く分るが、之は次の廻轉に於けるひねりを一層有力ならしめる爲めの反動動作である。但し之はスキーの位置に對して何等の變化を與へてはならない（六六頁）と言はれてゐるのであるが、映畫では變化が與へられてゐるどころか、或場面では初めは反對側に廻轉するのかと思はれた位、準備ひねりの方向にスキーが廻轉してゐた。そして說明用の圖解に於けるシュプールも、明かにその樣に曲つてゐた樣に思ふのは、私の記憶の誤りであつたらうか？

アレーの廻轉が、他の流派の平行クリステイアニアと異る點は、準備姿勢に續くひねりである。（註、アレーはひねりなる語は用ひてないが、彼の言ふ體の廻轉をこゝでひねりと言ふ事にする。）之は體のひねりと言ふより、スキーの後部を振り落すと言つた方が分りよいであらう。こゝに橫滑りの發展が感じられるのである。勿論强い前傾が要求せられるが、それは足頸と爪先の屈折に依つて得られる（六八頁）のであり、從つて靴の踵はスキー木部から浮き上る事もあり得る譯で、この故にこそ、踵を强く引くアレー式締具が必要とされるに至つたのであらう。

スキーの後部より拔重する事は、前傾と、もう一つは、膝の屈折を增して、脚でスキーの後部を引き上げる事に依つて行ふのである。（七一頁）アレーは膝の屈折のみと言つてゐるが、之は當然足頸並に爪先の屈折をも伴ふと考へられるのである。兎に角スキーの後部を引き上げ、之を廻轉反對側の谷へ振り落す所が最も重要なのであるが、この場合、他の平行クリステイアニアの樣にこゝで跳ね上つたり、伸び上つたりして、スキーから拔重してはいけないのである。（六七、七二頁）雪が惡い、又は深い、或は弧の小さい廻轉が要求せられる、或は速力が遲いと言ふ樣な場合は、スキー後部は雪面から二〇―三〇糎も引き上げられて廻轉させられるのである。（七二頁）此のスキーの後部の振り落しは體の廻轉即ちひねりに依つてなされるのであるが、此のひねりで重要な事は廻轉の行はれてゐる間中、體はスキーの上に正しく眞直ぐ乘つてゐて『內側へも外側へも傾いてはならない』（六九頁）のであり、又『廻轉そのものは身體全體が一體となつて』即ち、膝、股、足頸が別々に曲るのではなく、それらの『動作全部が一體となつてスキーに移される』（六九頁）事である。之で廻轉が終つたのであるが、廻轉の終りに於て、體重が內足スキーに戻され、此の戻され方で廻轉弧の大小に相違を來たすと言ふのであるが、どうも意味がはつきりしないから、譯本通り次に拔き出さう。

『廻轉準備の場合は、體重は內側スキーの內側エッヂから兩スキーに移し、旋回最中は外側スキーの內側エッヂに置く。最後に體

重を兩スキーにかけるか、内側スキーの外側エッヂに比較的多くかけるかは、クリスティアニアを早く停めるかどうかに依るのである。實際旋回の終りで外側スキーに體重を殘すと、旋回の弧を大きくし、雪と速度の條件次第では、旋回又は停止の半徑を增大する。旋回の終りに於て、體重を兩スキーにかけること、又は内側スキーにかけることは、非常に微妙な差異（ニュアンス）を表はすものである。それ故に普通クリスティアニア・ヒュールを行ふ間中、外側スキーに乘るやうに習慣づけた方が良いやうである。そして兩スキー及び内側スキーに乘る方法は、うんと技術的に進歩上達してから、行ふ方が良い。』

外に肩の位置、ストックの位置が論じられてゐるが、此處では省く。

以上で明らかの樣に、アレーのクリスティアニアの特徴は、外足體重・スキー後部振り落し回轉であり、ライン一派の獨逸流の「跳ね上り前傾外傾」は不安定（九四頁）であり、且又回轉の弧を大きくする（九二頁）故に排斥せられるものである。兩者の比較取捨は到底我々のなし得る所ではないけれど、ラインルの外足體重遠心力廻轉は、確に理論的に我々に教へる所があるに反し、アレーのひねり廻轉は、外足體重の點にいささか疑問あるも、實踐的なものとして、又我々に教へる所あるを認めざるを得ないのである。而してその兩者何れにも共通の點は鋭い前傾である。これこそ、新しいスキー術が、古いスキー術に教へる最大の點であり、それ以外は、各人の特徴に依つて取捨すべきものであらう。ラインルにしても、アレーにしても、その主張する高速度クリスティアニアが、一般スキーツアーにも、山岳にも、そして、誰にでも應用が出來、實際に効果をあげてゐると言ふのであるが、果して然りとすれば、我々にとつてそれは正しくスキーの驚異である。岳川の石ころ斜面を、乘鞍の夏路を、八方の尾根を、之等最高の技術で滑り下れたら何と痛快だらうか。そしてそれは夢ではなくて、誰にでも出來る現實だ。それには俺の學校へ習ひに來いとは言つてないが、此等の本を讀んで見て、それ等の先生のスキー振りではなくして、我々と同程度たる生徒のスキー振りを拜見したいものと思ふのである。

幸か不幸かあちらの模樣を知らぬ私には、彼等が出來ると言ふ事に反對するすべがない。然し日本の山では、正しくアレーの言ふ樣にやらせて見せて呉れなくては、我々は信ずる事が出來ない。前にも述べた通り、我々が探してゐるものは、特殊の巨人のみが使用し得る特殊技術——これこそ競技に勝つ事が唯一の目的だ——ではなくて、より多數の人がなし得る、客觀的に一般的な山スキー技術なのだ。アレーを見て、驚いてゐる丈では、我々の必要なものは生れて來ない。轉びつゝ又轉びつゝ、轉ぶ事のみがそれを生み出す唯一の道であらう。

轉べ、轉べ、正しく轉べ、やがて時が問題を解決して呉れるであらう。

× ×

尚前、後篇を通じて『』につゝんだ所は譯本通りその儘書いたのである。その積りで讀んで欲しい。

ラインルの平行クリスティアニアの所で言ひ忘れた點があるか

ら、こゝに附け加へて置き度い。それはラインルのひねりなし廻轉が、實際は前以てひねつた廻轉であると言ふ事である。それは、斜滑降の姿勢で上體が既に廻轉方向に向つてゐるのであるから、その方向に向つて跳ね伸びれば、下半身は上半身につれて廻轉する、從つてスキーも廻轉するものだからである。之はスキーフランセ中に於て、アレーがラインル一派を批評する所で『スキーが體で向け換へられた新しい方向、即ち旋回の方向に向ふのは、この體を前へ伸び上らしてスキーを抜重した瞬間である』(九三頁)と言つてゐるのを見ても分るであらう。之を「目に見えないひねり」と言ふのかどうかは不明であるが、兎に角ひねりがこゝに作用してゐる事は認めざるを得ないと思ふのである。

以上二書の中、ラインルのものは譯もうまいし値段も安い。アレーのものは譯が下手と言ふより誤譯と思はれる所が澤山あり、非常に讀み難く、且値段も高い。が然しどちらも、殘念ながら日本人の書いたものより、優秀なのは、著者がすぐれたものを持つてゐるからである。一讀の價値はあらう。(以上)

二つの小さな山行き

カン

三月から四月へかけての春淺き日、夜行日歸りの小さな山行きを試みました。

三月二十日の夜行で、三ツ峠行きのアイアイ連中と同車し、れへと溯り、大野の村はづれで焚火をして朝食をするうち、夜もつかり明け離れました。池ノ平が午前六時半、山の北側はまだ眞白の殘雪です。こゝからクラミ澤沿ひにぐん〳〵と登り、御正體神社で再度食事をとり、富士や南アの眺望を恣にして頂上往復、十一時半にこゝを立つて開地村細野へ下りました。この徑は今ではなく急斜面をいゝ加減下りて了ひましたが、本當は大平の神社の所から徑がある由です。この日は全國的に非常に氣温の高い日でしたが、さすが御正體の頂上附近は一面の殘雪でそれに登山者も極く少なくいゝ氣分を味はへました。

四月二日の夜行では、大倉高丸へ行きました。この小さな突起は近所の山の中、私の好きな所の一つであり、既に前に二度も登つてゐますが、今度も南アの銀屏風が見たくて行つてみました。初鹿野で下車。田野鑛泉で朝食を攝り、明るくなつて出發。大藏澤の右岸の徑はずつと奥まで實に良くなつてしまつて、それだけにプリミチーブな感に乏しくなりました。大倉高丸の頂で十時から一時間餘もゆつくり休養しつゝ南アの全く素晴らしい銀嶺を眺め、連嶺を南走して曲り澤峠から景德院に出て初鹿野へ下りました。

富士の眺めは御正體山の方が素的ですが、四月三日は空氣が殊に澄んでゐたせいか、南アから八ヶ岳、奥秩父の大屏風は、未だ嘗て經驗しなかつた程莊嚴な姿をみせてくれました。(一九四一・四)

×

×

×

記錄

○スキー日記

（一）五色家形小屋（一月二日―五日）　中川孫一外二名

寡雪のため文字通り五色のスキーになつた。ドロンコ、テレンコ、バリバリ、ブツシュ、粉雪と下から上に進むにつれてスキー可能になる。青木小屋から家形山の肩迄の往復はやゝスキーらしいスキーだつた。始めての五色行から八年目である。當時を想ふと感慨に堪えない。

（二）湯澤（二月二日）　中川孫一外六名

新兵訓練。布場ゲレンデは錢湯の流場の如し。

（三）奥日光（二月十五日―十六日）　中川孫一、堀岡清

熊さんの鍛練會荒し（之は堀岡の發案である）と奥日光の粉雪を狙つて行つた。やはり寡雪で半分鉄スキーになつた。こゝも八年振で、五色山の降りは師匠から折紙をいただき面目をほどこした。

（四）赤倉（三月九日―十日）　中川孫一外十八名

會社のスキー大會である。こゝは六年振。赤倉ホテル前のゲレンデは夏の鎌倉。ビーチパラソル多數。

（五）燒額、龍王尾根（三月二十一日―二十三日）

中川孫一外一名

待望のルートである。發哺の裏山東館、寺小屋、燒額悉くスキーのパラダイスたるざるはない。殊に東館は毛無に髣髴としてゐるし、燒額の降滑はこよなくすばらしい。龍王の大降滑は氷雨に見舞はれ、ガスのため視界約五十米、全ルートはアイスバーンとなり、所々猛ジヤングルを交へ、困難を極めた。しかし、高距約一、〇〇〇米の大滑降は雪にめぐまれたならば、斷然一度は君の雪艇を走らす價値がある。

遠見尾根スキー行（三月二十一―三日）

増山清太郎、小柳二郎

例の國立公園協會の乘鞍行とブツかつて、三十日の夜行はスキー列車よろしく、超滿員だつた。

大町で下りたら氣温十八度と開かれて開いた口がふさがらなかつた。とんだお彼岸日和に出會したもので、その日の午後から、雨ともみぞれともつかぬ奴が降つたり止んだり、結局現役のテント訪問が唯一の收穫だつたといふわけ。でも遠見は驛から近くて、練習には仲々良い所の様だ。

乾徳山

四月十九日―二十日

高橋要二外二名

去る十九日午後零時三十五分新宿發の列車で同日は鹽山から徳和に至り、山登旅館に一泊。翌朝夜行列車で追かけて來た者と併せて三名乾徳山に登りました。折柄の快晴に惠まれて眺望絶佳と思つてゐた處、春山の御多聞にもれず、南の大屏風は春霞に妨げられて全然駄目でした。然し奥秩父の方は申分なく、特に奥千丈のドームと金峯の肩の殘雪が印象的でした。此の山は最近村尾氏初め、林、吹原、常盤先生等多數の針葉樹會員が登つて居る由ですが、小生も遲ればせ乍ら馳せ參じた次第です。確かに近くでの良い山と思ひました。

新羅二郎君よりの戰地便り（三月二十四日受信）

御無沙汰してます。其後如何ですか？ 先達針葉樹會報拜見、新編輯幹事として又御活躍の由。鷹野中尉殿は全く惜しい事をしました。眞實の樣に思はれません。自分は相變らず至極元氣で働いて居ます。當地も段々春めいて參りました。皆樣によろしく。

（編輯者宛）

中支派遣軍熊谷部隊氣付 鈴木部隊 角田部隊 鹽津隊

（自十六年一月 至十六年三月）

山岳部報告（自十六年一月 至十六年三月）

記錄

○木曾御岳（一、三一—二、二） 堀岡先輩、大塚、佐藤、松下、小林、前田

ちら〳〵と小雪の舞ふ中を一日、中ノ小舍泊り、翌日頂上を極め快適なスキーを滿喫す。

○野澤スキー行（二、二一—二、二三） 細野

○遠見尾根天幕生活（三、一五—三、二五） 堀岡先輩、根本、久保、松下、小林、原田、佐野、清水、前田、間々田、關根

本科陣に故障者續出し、遂に round Kashima 轉じて、遠見合宿となる。中遠見に天幕二張建て、一部遠見小屋と交替に全員天幕に入る。N・Kを除く外皆始めての雪上幕營なる故、種々珍事を起したが、色々各自よい經驗になつた。此春は稀に見る暖氣の爲雨に天幕を叩かれるやら、天氣はあんまり良くなかつた。二十一日五龍岳登頂、二十二日五龍岳東壁試登す。尙堀岡先輩には荷上げに大いにお世話になり、又、增山、小柳、兩先輩の天幕御慰問を忝くす。

日誌

○春山準備會 二月五日 於國立
○春山準備會 三月十三日 於國立
○新體制準備會 四月九日 於國立

學園新體制により一躍七十有餘名の班員を有するに至つたので、これが對策として種々班運用方法を研究する。本日以後歡迎會に至る迄、完く此れが事務に一同沒入す。

○新入部員歡迎會 四月十七日 於國立

豫科の歡迎會を開く。常盤部長を圍み愉快な一夕であつた。

出席者 常盤部長以下全部員、（新入部員）林戸茂男（豫二）樋口洪、小林卓元（以上豫一）

○新入部員歡迎會 四月十八日 於國立

專門部の歡迎會を開く。

出席者 本科、專門部部員、（新入部員）岡田敏男、大崎幸太郎、長沼廣次、新倉健一（以上專一）

○春山報告會 四月二十一日 於國立

本日一名入部、森 一則（本二）

針葉樹會定例集會 三月二十七日（木） 於如水會館

出席者（會員） 中川、吉澤（一）、村尾、赤城、高橋、山口、太田、高見、增山、鈴木、堀岡、林、柿原、望月、鷲崎、佐々木、岩崎、大塚、日江井、小柳（部員）宮城、山田、久保

今度目出度く卒業して會員となつた岩崎、日江井、大塚、三君

の歡迎を兼れて皆で食事をする。折しも遙々岡山より上京中の珍客赤城君を迎へていよ〳〵精彩を添へた。春山の收穫やら、卒業生を圍んで母校の噂話から、カンニングの話、クラス全員枕を並べて落第したさいふ樣な昔話に花が咲く。中集會室に席を替へるや、カドタのアイセンがポツキリ折れたさいふ話しから始まつてマゴさんの舌端いよ〳〵テンポを加へそれからそれへと止るところを知らず、落着くところは例によつて例の如くといつたわけで、木戸錢タダでは勿體ない樣な一夕だつた。

針葉樹會定例集會　四月二十二日(火)　於如水會館

出席者(會員)吉澤(一)、高見、增山、丸茂、小柳、望月、佐々木、岩崎、大塚、(部員)佐藤、久保、根本、原田、前田、清水、古澤、小林「クマさん西へ行く」の報、新聞紙上に現はれて話題は茲に集まつたが、御本尊、多くを語らず。戰爭が世界的規模にまで發展せんとしつゝある現在、ヒマラヤは當分駄目でせうが、せめて本場のアルプスだけでも踏んで來て貰ひ度いものです。

新入會員

岩崎　利一君　卒業後引續き母校、研究科にて研鑽を積まれる由。

日江井正己君　三菱製紙株式會社へ就職決定されました。
(通信先)兵庫縣加古郡高砂町、三菱製紙職員合宿所

大塚　武君　日本銀行審査部へ勤務される事になりました。
住所は從前通り。

消息

打橋　壽朗君　(轉任)日本製粉株式會社橫濱工場總務課　(住所)鎌倉市腰越四道二四九番地

山口　稔一君　(勤務先訂正)芝浦工作機械株式會社營業部(京橋區銀座西五丁目　マツダビル、電話銀座四二五)

丸茂　平造君　(東京住所)四谷區大番町十九番地
(勤務先)丸茂慶量衡株式會社東京支店(神田區須田町一ノ二四、電話神田二七六七、一二一)

名幹事望月達夫君の跡を承けてこれが三度目の編輯で、本號に初めて編輯者の言葉を掲せる事になりました。元來の怠け者で、たつた三號目でもう一ケ月も遲れるさいふ始末、こんな不適任はないと思ふのですが、外に適任者が現はれる迄ヤレといふ御命令で再度のおつとめとはなつた次第です。所が忽ち適任者が現はれて、次號からは既に定評ある林俊介君が擔當する事になりました。

尙、同時に會計幹事には堀岡清君が就任致しました。

扨、次號からの原稿はもう早速種切れさいふ狀態ですから、內容の如何を問はずどしどし御寄稿の程懇願し奉るわけです。殊に最近地方在住の方からちつとも原稿が參りませんが消息なり、御健在を證明して頂き度いものです。(小柳記)

十六年度會費御納め下さい

在京會員　六圓
地方會員　三圓

東京市日本橋區室町二ノ一　三井物產株式會社內　堀岡清宛

針葉樹會報第十二年第三號　昭和十六年六月一日發行　(編輯　小柳二郎)